



▲伊達政宗公復顔像

そのほか、制作過程を記録した動画の放映や、狩野安信が描いた政宗公の肖像画の複製パネルも展示。会場には、観光客など多くの人が訪れ、肌の質感や髪型などが精密に再現された復顔像に見入っていました。

仙台七夕まつりの開催に合わせ、8月3日から15日まで、地下鉄国際センター駅構内で、伊達政宗公復顔像特別展示が行われました。この復顔像は、瑞鳳殿の協力の下、伊達家とNHKの共同企画により制作されたものです。昭和50年代にも容貌像がつくられていましたが、今回、最先端の科学的調査と復顔技法で制作されたことにより、眼窩の高さが左右異なっていたことが判明。また、付け根から大きく隆起した鼻の形も推定され、今までよりもさらに実像に近い素顔がよみがえりました。

市政トピックス

仙台七夕まつりにより
みがえる伊達政宗公
の素顔



▲部活動や生徒会活動などの
質問が繰り広げられた交流会

校では地域の方と一緒に花植えなどの活動をしていることなどが紹介され、生徒たちは「自分の学校でも取り入れたい」などと話していました。

8月5日に行われた交流会では、最初に八軒中学校の生徒が歓迎の気持ちを含め、歌を披露。その後、それぞれの学校行事や生徒会活動などについて、意見交換を行いました。高社中学校では生徒会新聞を作成していることや、八軒中学校では地域の方と一緒に花植えなどの活動をしていることなどが紹介され、生徒たちは「自分の学校でも取り入れたい」などと話していました。

市政トピックス

音楽姉妹都市・中野
市から「学校新聞特派員」が来仙



▲日差しが降り注ぐ中、スナガニ博士(右)と一緒にスナガニを探しました



▶はさみの大きさが左右で異なるのが特徴のスナガニ

8月5日、6日に、音楽姉妹都市である長野県中野市の高社中学校から、生徒3人が「学校新聞特派員」として仙台を訪れ、八軒中学校の生徒との交流会と、土井晩翠ゆかりの地である晩翠草堂などの市内見学を行いました。姉妹都市交流として、中野市の中学生は3年に一度本市を訪れ、学校新聞などでその様子を紹介していましたが、今回は5年ぶりの訪問となりました。

7月28日には「荒浜のスナガニ博士とスナガニさがし」が行われ、児童と保護者27人が参加。最初に、荒浜で生まれ育ったスナガニ博士の佐藤豊さんから、スナガニの生態や宮城県で絶滅危惧Ⅱ類に選定されていることなどの説明を受けました。また、東日本大震災の津波で荒浜から姿を消したものの、海岸清掃を行う中で徐々に戻ってきたという話に、子どもたちは興味深そうに耳を傾けていました。

地域に伝わる物語「スナガニこたろう」の紙芝居を楽しんだ後、いよいよスナガニを探しに深沼海岸へ。最初はなかなか見つからない様子でしたが、スナガニ博士にアドバイスをもらいながら巣穴を掘り進めていくと、中に潜んでいたスナガニを発見。子どもたちから「見つけた」と喜びの声が次々と上がっていました。参加者たちは、波打ち際を動き回るスナガニの様子を楽しげに眺めながら、夏の海辺を満喫していました。

市政トピックス

東部沿岸地域の魅力を発掘！
「夏色ドロップス

7月18日から8月23日まで、深沼海岸などを会場に「夏色ドロップスーあそんで味わう、せんだいの海辺」が開催されました。夏色ドロップスは、海辺での遊びを通して、東部沿岸地域の豊かな自然や地域に受け継がれてきた生活文化などの魅力を発見・体験してもらうことを目的に、せんだい3・11メモリアル交流館が企画した夏休みイベント。期間中、貞山堀の

釣り体験や、海辺の竹を使った虫かご作りなど、10種類のプログラムが用意されました。

7月28日には「荒浜のスナガニ博士とスナガニさがし」が行われ、児童と保護者27人が参加。最初に、荒浜で生まれ育ったスナガニ博士の佐藤豊さんから、スナガニの生態や宮城県で絶滅危惧Ⅱ類に選定されていることなどの説明を受けました。また、東日本大震災の津波で荒浜から姿を消したものの、海岸清掃を行う中で徐々に戻ってきたという話に、子どもたちは興味深そうに耳を傾けていました。

市政トピックス

ものづくりの素晴らしさを
知る「親子ふれあい探検隊



▶熱したガラスの扱いに注意しながらフラスコ作り



◀好きな型を選んで藍染めを行う参加者

小学生と保護者が職人の仕事場を見学し、職人技を体験する「親子ふれあい探検隊」が、7月23日、8月1日の2日間にわたって開催されました。これは、職人との交流を通して、人々の生活を支えてきた職人の技術や技能を守り、伝承することを目的としたものです。

8月1日は、初めに東北大学大学院理学研究科・理学部硝子機器開発・研修室を訪問。この施設では、110年以上に渡り、大学などからの依頼を受け、実験用精密ガラス器具・ガラス装置の製作をしています。最初にガラスの加工について説明を受けた後、高温のバーナーでガラスを溶かしながら器具を作る様子を見学しました。

次に子どもたちが小さなフラスコ作りを体験。職人の手を借りながら、真剣な様子で息を吹き込んでガラスを膨らませたり、道具を使って変形させたりしていました。

体験後には「一人前になるまでどれくらいかかるか」などの質問を積極的にするなど、職人との触れ合いも楽しんでいました。

次に訪れたのは、明治20年の創業以来、神社の太のぼりや、のれ

んなどの染め物をつくる永勸染工場。職人から、仙台の染物文化の歴史や、染める手法などを学び、その後、はけを使った藍染体験を行いました。布の上に花や動物などさまざまな型を重ねて染色し、オリジナルのエコバッグを作成。子どもたちは、夢中になって作業を進め、完成したエコバッグを見て、うれしそうな表情を浮かべていました。

探検後には、参加者から「職人の仕事は大変そうだなと思っていたが、実際にやってみると楽しかった」「他にどんな職人さんがいるんだろうと興味が高まった」といった感想が寄せられました。

市長コラム

春夏秋冬

仙台市長 郡 和子

秋到来ースポーツにコメるおもい

先日、室伏広治スポーツ庁長官にお話を伺う機会がありました。執務室に米俵を置き、時折、俵を両手で掲げるエクササイズをしているのだそう。なぜ米俵？と思いましたが、100年前の写真に、米俵三俵担いだ女性の写真に、米俵三俵担いだ女性とこのこと。米俵一俵は60キロ。全てにお米60キロ入っていたかは分かりませんが、いざれにしてもすごい力持ちです。お話を聞いて思い出したことがあります。私が子どもの頃のことです。閑上や山形から女性たちが大きな背負籠に魚や果物等をたくさん積んで、仙台で行商をされていた姿を。確かに、力持ちで足腰の強い女性は少なくなかった！暮らしや生業の場で力を使うのは、男性に限ったことではありませんでした。

が、室伏広治スポーツ庁長官が行ったスポーツに関する意識調査で「週1回以上スポーツを行う」と回答した15歳以上の市民の割合です。一方、「運動をしていない」と答えた方は42・5%で、「時間が無い」「機会がない」などがその理由でした。暮らしの中で必要に迫られた身体活動が足腰や腕力を鍛え、米俵を軽々担ぐ人をつくっていったとすれば、日々のお風呂掃除やお子さんのスキンシップをエクササイズ感覚で取り組むことが、筋力アップにつながるのかもしれない。

100年前と比べ、仕事や生活のスタイル、社会環境は様変わりして体を動かす機会は格段に少なくなりました。心掛けないと私の歩数計の数字は目を疑うほど小さく、ましてや米俵を担ぐなんて夢のまた夢です。

仙台市では、前述の39・3%を令和8年度までに70%にする目標を掲げました。そもそも「スポーツ」の語源は、気晴らしをする、休養する、楽しむ、遊ぶなどを意味するラテン語だったそうですから、堅苦しく考える必要はありません。スポーツを広義に捉え、工夫を凝らし得意分野で楽しく体を動かすそんな「スポーツの秋」にしてみよう！

● 次回の掲載は12月号を予定しています